

二〇二五年度

山梨英和大学

総合型選抜（基礎学力型）試験問題

国語

注意

- 一 問題用紙解答用紙の冊子は、試験開始の合図があるまで開けないで下さい。
- 二 試験開始直後に次のことを確かめ、解答用紙を冊子からはずして使用して下さい。
 - ア 問題用紙は表紙を除いて四枚です。ページの順番も確認して下さい。
 - イ 解答用紙は、一枚です。
- 三 受験番号は、解答用紙に記入して下さい。氏名は書いてはいけません。
- 四 答えは解答用紙に記入して下さい。
- 五 問題用紙は、試験終了後、各自持ち帰って下さい。

国語

次の問題文を読んで、後の問に答えなさい。

2020年春からのコロナ禍で、日本人はみなマスクマンになった。プロレスのタイガーマスクや 獣神サ
ン
ダー・ライガーの大ファンであった私でも、さすがに出会う人出会う人ことごとくがマスクというものには参っ
てしまった。

(a) この3年間、実はこの国ではマスク着用が「義務」づけられたことは一度もなかったのである。欧
米や韓国、香港、台湾では義務づけられていたのだが。ここで 露あわになったのが日本人の「同調圧力」の強
さ
だ。政府は「要請」とか「推奨」といった言葉を使ってきた。法律によって義務づけられた訳ではないのに、
日本人は互いに互いを監視し合い、また他人の目を気にして、嫌でも自らマスクをしてきたのである。

「マスク警察」(ここでの「警察」とは、私的に取り締まりや攻撃を行う一般市民や、その行為・フウチョウを
指すスラング)と呼ばれる人々もいた。この人々はとにかく逸脱する人を許さなかった。これはまさに戦中の
②

「隣組」(国民トウセイのためにつくられた地域組織)にも似ていた(私はその時代を生きていないので経験
A
はしていないが)。敗戦して70年余。令和になっても日本人には、隣人を監視し逸脱を咎とがめる「隣組」的メン
タリテイが根付いていることに気づかされた。

で、2023年3月13日から「マスクは個人の判断で」という厚生労働省からのルールがシコウ③されること
になった。ところがこのルールがひどいルールの典型なのである。

(b)、冒頭では「個人の(I)な選択を尊重し、着用は個人の判断に委ねることになります」と言っ
ているが、読み進めていくと「マスク着用の考え方」のカシヨ⑤で「アドバイザリーボード(諮問委員会)で示
された専門家の考え方も踏まえ」とし、「基本的な感染対策としてのマスク着用の位置づけは変更しない」とあ
る。

(c) 3月13日から「着用は個人の判断で」に転換するのには、20年春から3年間の専門家集団による「感
染予防にマスクはヒツス⑦」という考え方は変わっていないのである。なのになぜ急に転換できるのか、その科
学的根拠が示されていない。これでは着用をやめようとする人も不安だろうし、それで何かあったら「はい自
己責任ね」と片付けるつもりなのか。

(d) 「個人の判断で」と言っておきながら、そのあとにさまざまなケースを挙げ、「マスクの着用を推奨
する」「着用が効果的」「着用しましょう」「着用をお願いします」と、とにかくがんじがらめなのである。
B

異なるはずだ。新ルールでは個人の判断が優先されるわけだから、「同調圧力に屈しない」乗客同士で揉め事が

起こるかもしれない。要するにルールとして中途半端なので、かえって現場に混乱を生む可能性がある。

コロナ禍前には、日本人ひとりひとりはマスクについてはまったく自由だった。他人がマスクを着けようが着けまいが、それをあれこれ問題にするとか咎める人はいなかった。そもそもマスクはコロナ対策のためだけのものではない。マスクを着ける人にも、インフルエンザ予防のためとか、花粉症対策など、いろいろな理由があるし、そのことについての皆の暗黙の了解があった。あのカンヨウさはどこに行ってしまったのだろうか？

2020年からマスク着用を中途半端にルール化してしまったことによって発生したのが、まったく「V」な「マスク警察」であった。コロナの感染予防にマスクが有効だと信じられていたときには、公共交通機関や公共の場でマスク着用が要請されていたのは仕方なかったにせよ、ただの一人Hに、マスクを着けていない他人を咎めつるし上げる人々が結構いた。そういう人々の背中を押したのが、「同調圧力」と「要請」という、政府が責任を負わずにすむような自生的なルールだったのである。

「マスク警察」はマスクを着けていない人々を見つけては責め立て、それが原因の揉め事で深刻な傷害事件まで起こったほどだ。事情があつてマスクを着けたくない人にとっては暗黒時代だったであろう。

(e) マスク着用が、理由も明らかにされず突然「個人の判断」となった今日、かつての恨みを晴らした人々なのか、案の定「マスクするな警察」が出現している。しかも結構発言力のある著名人にこういう人々が見られるのだ。

もともと反マスクの考えをもっている有名な作家のエピソードである。その彼が、2023年2月のある日に、「日だまりの老夫婦。なぜマスクをしているのだろうか？ 不思議の国・日本」との文章と共に、マスク姿の高齢夫婦（ちなみに作家はその夫婦が誰だか分からないと言っている）の写真をSNSに投稿した。文章はさらに続き、「やはりマスクは不自然で変ですよ」と呟いている。彼の投稿のシユシは件の高齢夫婦を責めるのではなく、感染症の専門医が恐怖を煽り続けることや政府がコロナの5類移行にもたついていたことへの批判で締めくくられている。

しかしそれなら、わざわざ彼の知己でもない高齢夫婦の写真を無断で撮り、「マスク姿が不自然」と揶揄する

コメントをつけて世界に晒す必要はなかったのではないか？ この時期はまだ政府が「マスクは個人の判断で」

と明言していなかった時期でもあるし、コロナに不安を抱く高齢者がマスクを着けようが、それは個人の選択の自由であろう。しかも夫婦はこの作家に何ら迷惑をかけている訳ではない。ふたりはひよつとしたらインフルエンザや花粉症対策など、他の理由のためにマスクを着けていたのかもしれない。それらの可能性も想像せられず、あたかも「不思議の国・日本」の象徴であるかのように、何の罪もない一般夫婦の画像を晒すとは、何と配慮がないのだろうかと感じた。

突然理由も示されず、「マスクは個人の判断で」と政府の呼びかけが転換されるやいなや、今度は「反マスク派」の中でも過激な人々が、自分の判断でマスクを着けている人々に対して、自分がかつて受けた嫌な仕打ちを与えているということに気づかないのだろうか。

(住吉雅美『ルールはそもそもなんのためにあるのか』)

問一 傍線部①～⑩のカタカナは漢字に直し、漢字には読みをつけなさい。

問二 空欄（ a ）～（ e ）に当てはまる最も適切な接続語を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ さらに ウ そして エ やがて オ ところが
カ もちろん キ しかも ク ところで ケ まず コ やはり

問三 空欄（ I ）～（ V ）に当てはまる最も適切な語句を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 積極的 イ 主体的 ウ 歴史的 エ 伝統的 オ 概念的
カ 公共的 キ 自発的 ク 一般的 ケ 世界的 コ 言語的

問四 傍線部 A のメンタリテイとはどういったものか、本文に即して答えなさい。

問五 傍線部 B 「がんじがらめ」、C 「婉曲的表現」、G 「暗黙の了解」、H 「私人」、I 「案の定」の意味をそれぞれ答えなさい。

問六 傍線部 D の人々とはどういった人のことなのか、本文の文脈を踏まえて答えなさい。

問七 空欄（ E ）に当てはまる最も適切な語句は何か、本文中から抜き出して答えなさい。

問八 傍線部 F の理由を答えなさい。

問九 傍線部 J のように筆者が考えるのはどうしてか、本文の内容を踏まえて説明しなさい。

問十 問題文には以下の段落が抜けているのだが、どの部分に入れるのが適切か、当てはまる場所の前の段落の最後と後の段落の最初の五文字をそれぞれ答えなさい。ただし、記号も一文字と数える。

要するにコロナ禍前の感覚に戻ればよいだけの話なのである。マスクについてのルールとか、マスクについての議論などやめてしまった方がましである。